

79

明日のまちづくり.....②

高齢者の健康づくりと足の確保について

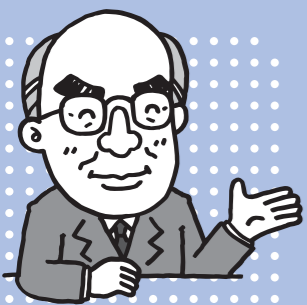
高齢化がこのまま進行するとこの先一体何が起きるのか。平成17年の国勢調査の詳しい分析によって、興味ある予測が明らかになりました。まず、町民の平均年齢が県下39市町のうちで7位の位置にある若い吉田町といえども、今から26年後の平成47年には人口に占める高齢者の割合が30・9%と3割を超えること、次いで、現在は高齢者の総数に占める割合は前期高齢者が後期高齢者を上回っているが、今からわずか6年後の平成27年にはこれが逆転し、後期高齢者が前期高齢者を上回るこの2点です。

この予測が示唆することは、①町の運営は高齢者の参加がなければ成り立たないこと、②高齢者の健康づくりの環境整備にこれまで以上に努める必要があるもの、とりわけ75歳以上の後期高齢者に対しては移動手段である足の確保がネックになる可能性があることです。言い換えれば、『持続する福祉社会の建設』の指針の一つである『健康を維持しやすく、社会に参加しやすい環境づくり』は、車の運転がおぼつかなくなる後期高齢者の皆さまには絵に描いた餅になってしまう恐れがあります。『健康で元気な高齢者が生き生きと楽しく生きがいをもって日々を過ごすことができるまちづくり』が急務となってきます。これまではパーツ・パーツで個別的に対応してきましたが、これからは高齢者の健康づくりを一体的に政策化し、組織的に関連付けて事業化しなければ大きな成功は望めません。

ごせる部屋を作ってくれませんか。え。もつと小さな子どもを持った友達がスポーツをやりたいといっているんですが、託児室のようなものがあれば、交代でベビシッターをやつてスポーツを楽しめるんだけどなあ。考えてくださいよ、お願いします。』

若いパパやママにしてみれば、「スポーツを楽しみたいが子どものことを考えると躊躇してしまうので、スポーツをしている間、子どもを預けることのできる託児室があればそこに子どもを預け、スポーツを楽しめるのだが、どうにかならないかな」ということなのです。若いパパ・ママのネックは、スポーツをしている間の安心できる子どもの面倒見だったのです。

翌年、若いパパ・ママの要望に応じて総合体育館に託児室を設けました。誰かがベビシッターになって子どもを預かり、テレビが置かれた託児室で子どもたちはテレビ番組を見たり、テレビゲームをしたりして時間を過ごし、若いパパ・ママはその間は友達と一緒にスポーツを楽しむ



町長からのメッセージ

んで自分の時間を満喫できるようになったのではないのでしょうか。

グラウンド・ゴルフ大会

高齢者に最も人気のあるスポーツは、グラウンド・ゴルフと言っても間違っていないでしょう。ゴルフバックを背負ったり、自転車の荷かごに入れたり、あるいは仲間と軽自動車に積みこんだり、それぞれ高齢者の方々がいそいそとグラウンド・ゴルフ場に向かう光景をよく目にします。

私もグラウンド・ゴルフが好きです。この仕事についてから、ほとんど時間が取れなくてなかなかやる機会がありませんが、たまにやってホールインワンをやった時など心が弾みます。

大会があれば、大勢の方が参加されますが、グラウンド・ゴルフが純粹に一人一人の得点争いという競技の性格から仲間げんかにならずに楽しめる競技であることに加えて、大勢が参加する井戸端会議の役割を果たして情報交換の場にもなっていることが高齢者を引きつけるゆえんでしょう。

しかしながら、高齢者向けに一番適したスポーツに位置付けられるグラウンド・ゴルフの愛好者が二つのグループに分かれつつあるのを見て取れます。移動手段の有無です。高齢者の車の運転についても、世間の

町のみなさん、お元気ですか。



ふれあいカップ・バレーボール大会

5月24日、総合体育館で第20回吉田町ふれあいカップ・バレーボール大会が開催されました。私はお招きを受け、開会式でご挨拶をさせていただきましたが、会場は若いパパやママと並んで小さな子どもたちが大勢目につきました。この大会の代表者の方との話から、若いパパ・ママの考え方の一端が分かったような気がしました。

その方の話では、以前は結婚した女性がスポーツの世界にもどるのは子育てを終えてからだだったそうですが、今では子育てをしながらスポーツにいそいそ傾向が顕著になったとのことでした。子育てを終えてから

目が厳しくなってきました。老化が進めば、運動感覚も鈍ってきます。いつまでも車を運転できるものではありませんから、いつかは運転免許証を返納しなければならぬ日がやってきます。その日から移動手段の足が失われてしまいます。

75歳以上の後期高齢者がこれから年をおつてどんどん増えるということは、別な見方をすれば、移動手段の足が確保できない人々が増えるということに外なりません。足を確保しようとすれば、車を運転する人に同乗させてもらうように頼むしか方法がありませんが、毎度のこととなると遠慮も出て頼みづらくなつてきます。そしていつしか、家に引きこもるようになってしまい、世間との交わりがなくなつて身体ばかりか心までも老化のスピードが速まることになりまます。

健康福祉センター「はあとふる」を始めあちこちの町・区・町内会の施設で高齢者向けの健康づくりや趣味の教室が開かれています。それぞれの教室の指導者もそれなりに育ち、内容も充実してきているだけに、教室に参加を希望するものの、足が確保できないばかりに参加できない高齢者の声を聞くたびに心が痛みます。

足の確保について

団塊の世代が定年を迎えています。定年と時を同じくして、親の介護の

では年を取つてしまい面白くない、若いうちから子育てでもスポーツも趣味もやりたいことはどんどんやろうというように積極的に人生を楽しむ姿勢に舵を切り替えたということでしょうか。

3年ほど前のある晩、総合体育館をふらつと訪れたところ若いパパ・ママがバレーボールに興じている風景が目飛び込んできました。コート周りを子どもたちが走りまわっていました。ひとしきり試合を見て帰ろうとしたところ、数人のパパ・ママが『町長！ちょっと待って。』と声を掛けてきました。

『町長、お願いがあるんです。私たちがバレーボールをしている間、小さな子どもたちが安心して時間を過ごす問題に直接向き合う方もいます。団塊の世代に続く人々は、子どもの育児、親の介護など家庭内の仕事とさされていたものがアウトソーシングされ、社会化されてきた現実と向き合つて生活してきました。このような社会化のプロセスは、かなりの高齢者の方々も巻きこみ、あまり違和感もなくなつたと云えるのではないのでしょうか。『高齢者の足の確保』の問題も、アウトソーシングの手法で社会化——『人材バンク』——することで解決できるのではないかと考えています。』

『町の運営は高齢者の参加がなければ成り立たないこと』は誰が見ても一目瞭然です。そうです、誰もが参加することで町の運営が成り立つ『全員野球』の時代が来たのです。

全員野球の町の運営とは、町民の皆さま一人一人が共に手を取り合つて町を創り、町の運営に手を貸す運営の方法ではないのでしょうか。

若い人からお年寄りまで誰でも提供できるものもついています。お金、時間、技術、いろいろなものが浮かびます。吉田町人材バンク構想のプロジェクトを立ち上げます。そのキヤッチコピーは、『健康で元気な高齢者が生き生きと楽しく生きがいをもって日々を過ごすことのできる吉田町』でいかがでしょうか。